

司会の言葉

金子達夫*

第18回日本循環制御医学会において、ワークショップ(1)「Coronary Intervention の最前線」という表題の下、5人の演者の先生方に内科と外科それぞれの立場から、最前線についての講演をいただいた。

まず代田浩之先生(順天堂大学循環器内科)は、「冠動脈血行再建術の現状と展望」の表題で、内科外科両方の面から現状と今後についての総括のお話を述べられた。CABGとPTCAの比率が、わが国では諸外国に比べPTCAが多く独自の治療法を生み出している。しかし成績と予後は差が無いこと、ステントの出現が再狭窄防止に有効なこと、動脈グラフトにより長期開存が得られることを示された。今後、薬物やradiation, new device, 動脈グラフトの使用拡大が課題であるとの展望を述べられた。

つぎに加藤健一先生(横浜労災病院循環器科)に、「New Deviceについて」ということで、ロータブレードを中心講演いただいた。ステントでは、Palmaz Schatzに始まり、新しいCoil stentまでの適応と成績を示された。通過困難や強い硬化病変には、治験中であるロータブレードが良い適応であり、今後ステントとの組み合わせで新しい治療法の可能性を語られた。

林一郎先生(順天堂大学胸部外科)には、「MIDCAB (Minimally invasive coronary artery bypass grafting) の手術成績と適応」という外科で最もホットな話題を提供していただいた。その

適応、手術手技の実際、成績を最新の資料を示された。細かな適応に関してははまだ見解の一致を見ない部分であり、盛んな討論が展開された。

天野篤先生(新東京病院心臓血管外科)は、「橈骨動脈グラフトを用いた冠動脈バイパス術」について数多い経験からお話いただいた。新しい動脈グラフトである橈骨動脈を用いたCABGでは、わが国最多の症例数をもつ天野先生の成績と開存率は、将来静脈グラフトにとって代わる可能性を示唆された。

最後に大野猛三先生(心臓血管センター北海道大野病院)から、「弁膜疾患を合併した冠動脈疾患のCABG」という題で豊富な手術成績を示された。複雑化するCABGにおいて、弁疾患を併せて積極的な治療を行うことが良い成績につながるとの結論であった。

それぞれわが国を代表する施設、症例数、成績をもつ先生方にCoronary Interventionの最も新しい話題を提供していただいた。内科では、バルーンによるPTCA(最近ではPOBAと略されている)からステント、ロータブレードとnew deviceが今後も多く出現するであろうし、外科では、より困難な症例への挑戦とMIDCABに代表される低侵襲手術、新しい動脈グラフトの開拓など、この分野は日進月歩の変化を呈している。ワークショップとしての結論は出ないであろうが、今後の発展の途中経過としての一点を記録できたのではないかと思われた。

*群馬県立循環器病センター心臓血管外科